



# 5階までの長い階段

[ブサーが鳴って7  
(後篇)]

4月24日

Sudden Fiction Project

高階 經啓  
hirotakashina

## 4月24日のおはなし「5階までの長い階段[ブザーが鳴って7(後篇)]」

---

折り返し地点を過ぎて、人生の折り返し地点を過ぎて思うのは、すべてはあの日が出発点だったということだ。あの日が折り返し地点そのものであり、あの日がいまある自分のきっかけだった。

いまの自分に満足していないわけではない。それどころか、自分で自分を褒めてやりたいくらいにいい線を行っていると感じている。事務所にはコンスタントに人が訪れ、それぞれの人生のかすかな痕跡を残して行く。ある人はひっそりと訪れ、懺悔でもするように依頼内容を語る。仲間と連れ立って息を弾ませ陽気に冗談を飛ばしながら、彼らのささやかだが果てることのない夢を語って帰る人たちもいる。ぼくはそれを聞き、うなずき、頼まれたことを黙々と実行する。

ぼくには人並みの記憶力もなく、計算も試算も逆算も予算もおよそ算数っぽいものは縁がないとしか言いようがない。かろうじてぼくに関係があったのはあの日までの人生のご破算くらいだ。文字通り大地に叩き付けられ、一敗地にまみれたあの日から、それまで築き上げてきたものが一瞬にして音を立てて崩れ落ち、何もかも失ったあの日から、じりじりと這いずるようにしてぼくはやってきた。

依頼人が来ないときのぼくはせっせと手を動かしている。壁に立てかけてあるぶ厚い板の寸法を測り、鋸を引き、演劇の人たちの真似をして「なぐり」と呼ぶ金槌を片手に持って、釘を打ち込んで棚を作ったり、届いた椅子の座面をはがし、中のスポンジを新しいものに替え、知り合いに手配してもらった別珍の生地を裁断して座面を張り替える。ガンタッカーというホチキスのお化けを使って大きな針を打ち込んで行く時にはまるで拳銃の試し撃ちでもするような音が事務所の中に響き渡る。

依頼人が現れる。長い階段を昇ってせいぜい息を切らしながら。曰く、行方不明になったペットを探して欲しい。曰く、こっそり大切に保管していた個人的な宝物を家人に隠されてしまったので探して欲しい。曰く、妻が浮気調査をどこかの探偵に依頼しているかどうかを調査して欲しい。曰く、どこから手をつけたらいいかわからないくらい汚れた部屋の中から南沙織のセミヌードの載った『GORO』を見つけ出して欲しい。なんですって？ あなたの部屋の中からですか？ はい。わたしの部屋の中から。

自分が優秀な探偵だと言い張るつもりはない。調査員としてはいつまでたっても素人同然だし、何か決まった手順やノウハウを持っているわけでもない。引き受けた仕事を解決すべく、ただ黙々と取り組むだけだ。少し進んで何かにぶつかって、見直して方向を調整して、また進む。ごつごつとぶつかりながら正しい位置と正しい方針を手探りで見つけて行く。家具の手入れや再生と同じだ。すっきりした見通しや万全の見取り図などぼくの辞書にはない。

その結果、依頼人と無用な軋轢が生じることもある。そんな話を聞くと友人は——この事務所をたまり場にしてしばしば酒を飲みに来る友人は言う。「そこはさあ、ソシキ的にタイケイだって実行しないと。おまえのアプローチはジョウチョウなプロセスが多すぎて、結果的にクライアントの、触れて欲しくないポイントを掘り起こしてしまうんだよ」それを聞くとぼくは、あの日のことを思い出してはっとする。はっとするが、どうすることもできない。ぼくにはこうするしかないのだ。

たとえジョウチョウなプロセスで依頼人を傷付けてしまうのだとしても、それでも頼まれたことは果たしているのだ。ペットの本来の持ち主を明らかにし、宝物のセミの抜け殻が粉碎した粉を回収し、そもそもあなたには妻と言える人すらいないと言うことを納得させ、南沙織のセミヌードをじっくり鑑賞してから朗報を告げに行く。全ての仕事に対してそこまでやり遂げる調査員はあまりいないことをぼくは知っている。それがぼくの誇りだ。だからぼくは、ぼくのやり方でやるしかない。

それに、以前のぼくに比べたらずいぶんマシになったと思うこともあるのだ。あの日以前のぼくの人生は、いまから思うとどこか夢にも似た別世界のことのようだ。非現実的に思える。当時ぼくは驚嘆すべき素晴らしい左脳を持ち、計算高い打算に従って、縦横無尽にことばを駆使した仕事で食べていた。人生は快調で遮るものはなく、金の匂いに惹かれて集まる老若男女をぼくは思い通りに扱っていた。まるで所有物のように。それが誰かを傷付けているかどうかなど、考えたことすらなかった。

そう。あの頃に比べればずいぶんマシだと思う。少なくともいまのぼくは自分が不器用さで相手を傷付けていることをひりひりするほど感じ取り、受けとめ、埋め合わせようとしておろおろすることができる。ずっとマシだ。生クリームまみれになって地面に横たわり、悲鳴を上げ続けたあの日を境に、別な人間の別な人生を生きているように思うこともある。生クリーム占いを告げられたあの日から、文字通り這いずり上がるようにしてぼくはここまで、徒歩5階まで登ってきたのだ。

\* \* \*

ブザーが鳴って、ドアノブをひねる音がする。今度の依頼人はどんな人だろう。小柄な女性が現れ、人目を忍ぶ様子で警戒しながらするりと部屋に入ってくる。彼女の依頼内容は行方不明になった友人を捜して欲しいというものだ。手がかりは最後に届いた葉書だけで、そこには用件も何もなくひとこと、「さよなら、私の『桜の園』」と書かれていたのだと。

話を聞きながらぼくは思う。調査の中で、ぼくはまた彼女を傷付けてしまうことだろう。その

傷が、彼女の依頼内容と引き換えるに値するものであればいいのだけれど。ぼくにはそれを思うようにコントロールすることはできない。なぜなら、あの時の占いが言っていた通り、ぼくは「誰かを傷付けずには生きられない生き物」なのだから。

“ぼく”だって？ その時初めて違和感を覚える。“ぼく”だなんて、何を可愛い子ぶっているんだ？ 誰も傷付けないふりでもしているのか？ 自分が傷付きやすいとでも言いたいのか？ けれど代わりに自分のことを何と名乗ればいいのかわからない。一人称を失い途方に暮れながら精一杯身を乗り出し、彼女の依頼に聞き入る振りをする。

(「"続編リクエスト「(生クリーム占いの、占い内容に踏み込んだ続きの一作)」」 ordered by あとう ちえ-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

## 感謝の言葉と、お願い&お誘い

---

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

## 5階までの長い階段

<http://p.booklog.jp/book/48624>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/48624>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/48624>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.